座　談　会

森　まゆみ 氏
椿　真智子（東京学芸大学　地理学分野　助教授）
小川　　潔（東京学芸大学　環境科学分野　助教授）

小川：まず最初に椿さんのほうから「地域文化とは」ということについてお話をいただきまして、それを横糸に、森さんの話を縦糸にしながら話を進めていきたいと思います。

椿：文化地理学の椿と申します。よろしくお願いいたします。

私のほうは森さんとは全然違いまして、まちづくりとか地域づくりとかいった実践の方はほとんど経験をもちあわせておりません。そのことについては私自身非常に後ろめたいというかそんなことじゃいけないなと思いながらやっていたものですから、今日は非常にエネルギッシュに20年以上活躍していらっしゃいました森さんのお話を非常に楽しく聞かせていただきました。

私のほうからはじめに、森さんのお話を踏まえまして「地域文化」「景観」というものをキーワードにしまして地域文化や景観というものをどのように捉えながらまちづくりに活かしていくことができるのか、また森さん方の活動とどのようにリンクさせて考えていけるのかというお話をしたいなと考えております。

森さんのお話の中に、「生活文化」という言葉が何回か出てきたように思います。「地域文化とは」ということで最初に書いてしまっていますが、これは生活文化というものをほとんど同じものと捉えていただいて構いません。地域に根ざした生活文化ということじゃないかなと思います。この地域文化ということは、近年、行政ですとか、いろいろなところで地域振興やまちづくりをやっていますので、重要な言葉として使われています。また使う人によっても意味が異なるのが現実でして、「地域文化」というものを整理してみるとどうなるかということを、私自身の考え方ですが、3つほどにまとめてみました。

ひとつは、自然環境や風土に根ざした生活様式。生活様式というと少し堅苦しい感じもしますが、衣食住と考えていただければと思います。生活様式とか生活文化。まさに日常的な暮らしということかと思います。これは森さんたちが活躍しておられる谷根千で考えてみますと、行かれた方はわかると思いますが、台地と低地が非常に入り組んでいて、起伏に富んだ変化に富んだ土地ということがあると思います。先ほどたくさんの写真を見せていただきましたけど、変化に富んだ地形条件とか水とかが「谷根千らしさ」を作り出しているのだと思います。江戸時代や谷中生姜でも有名な場所でありましたし、植木屋さんも多かったというお話もありましたが、そういう生業形態、どのようにみなさんがお仕事をして暮らしてこられたかという暮らし方も、自然環境や風土に大きく関わっているのではないかと思います。

2番目は地域社会、別の表現で言いますと、共同体、コミュニティ、その中でできていく人間関係、社会関係などに注目したのですが、地域社会の中で形成される・継承される文化といっていいと思います。谷根千の場合はいわゆる区や市町村などといった行政上の単位ではない、非常にユニークな地域のまとまりだと思うのですが。森さんの本を読ませていただいたら、実際生活している生活者の意識の上でなんとなくまとまりのある、生活圏という言葉を使われてたかと思いますが、生活の視点でもって見たときの地域の枠組みの中で活動をしてらっしゃるというのが非常に面白いなという風に思いました。そういう社会関係や人間関係をつくりながら継承されていく文化というものが2つ目です。

最後の3番目は、近年の新しい傾向ではないかと思いますが、まちづくりや地域振興、観光化の取り組みの中で、もともとあった古いものだけではなくて、実は新しい地域文化や生活文化というものが創り出されているのではないかなと思います。これは温泉を掘ったりというような建物を作るということも含めまして、もとはあったけどなくなってしまったものを再生する、また新たに創り出すということも含まれると思いますが、そういう意味で新しい地域文化、生活文化というものが模索され、実践されているのではないのかなと思います。

このように地域文化を3つに整理してみたわけですが、まちづくりということを考えますと、地域文化が日本だけではなく世界中のあらゆる場所で、あらゆる立場の人たちが、私の町や村の地域文化をどんな風にしようか、どんな風に創っていこうかということをみなさん非常に一生懸命考えていると思いまして、そういう風に世界的な規模で地域文化が求められている、見直されているという状況がどうやって起こってきたのかということについてですが、いくつかの背景や要因が挙げられると思います。地域文化の創出の原因、背景となるものが何なのかということについてですね。

1番目には地域開発、都市再開発による急激な自然環境の変化、あるいは土地利用や景観の変化が挙げら

れると思います。日本の場合、全国的に見ましても、1960年代、高度経済成長期以降こういうことが急激に進んでいきます。それから2番目としまして地域コミュニティの変質や解体。これは谷根千の場合には長らく住んでいる方もおられるかとは思いますが、地域を構成するメンバーはどんどん変わっていく、世代も変わっていくということですね。そういうことによって地域の枠組み、結びつきということが変わっていくと。どちらかといえば社会的な結びつきが失われていく、そのような中で、このままでいいのか、作らなければいけないのじゃないかという動きがでてきたと思います。それから3番目は非常にシビアな問題で地域経済の停滞や衰退ということです。これは地域経済が駄目になっていくと地域文化どころではないのじゃないかと思えますが、意外に経済が衰退しますと逆に心の豊かさといいますか、経済的な面以外のところに光を当てて行こうという動きが出てくるという風に思います。4番目としましては、1番と関係してきますけれど、歴史的な資源、これは建物もそうですけど、お祭りとか有形無形様々なものがあると思いますが、歴史的資源が消えていく、なくなっていくということですね。それから5番目。これは非常に精神的・内面的な問題にもなりますが、今1番から4番までにあげたようなことの実態に伴って地域のみなさん方のアイデンティティ、地域に根ざした、ここが自分の生まれ育った町や場所なんだというようなローカルアイデンティティというものが薄くなっていくことへの危機感ですね。そして6番目としましては、今安倍内閣が美しい国づくりということを盛んに言っておりますが、そういった文化行政、文化社会政策、そういったものにお金を出すといった経済的な支援も付いてくることもありますが、そういう政策的な問題ですね。そして最後に7番目、記念行事・イベントと書きましたが、何かの組織ができて50周年とか100周年とかになりまして、何か記念的なイベントや行事を行う。一過性ではありますがそのようなイベントを行うことによって、過去の記憶を掘り起こしていくといったような取り組みがあわせて起こっていくということは結構ありまして。そのことをきっかけに地域文化がもう一度見直されていくということがあるのではないかなと思います。

今いくつか申しあげましたけれど、総じて言えば、グローバル化、グローバリゼーションとともにいろいろなかたちで生活や暮らしが均質化・画一化していくと。またそこに新たな格差、格差社会といわれていますが、不平等や差別というのも生まれてくる。実はその一方、相反する動きであるようなローカリゼーションというもの、地域や、民族主義的な動きですとか、そういったまちづくり、地域文化の再生といったものに様々な方が関心を持つようになっていく。こういう全国的、世界的な動きがあるように思います。

ではそういった中で地域文化、一体誰が何のために作ったり、再生していくのかということについて、主体が一体誰なのかということは非常に重要なことだと思います。森さんたちの活動の場合、先ほどのお話にもありましたが、地域の若い女性3人が集まって谷根千というメディアを作るということから始まったわけですけれども、文化ですから私たち個々人が継承したり伝えていく文化というのは当然あると思います。また個人を束ねている家庭や世帯もひとつの文化であるといえると思います。さらに地域に根ざした様々な組織ですとかNPO団体であるとかいう地域のレベルでも活動主体があると思います。地域の中には、行政という立場でもって様々な取り組みや議論をしている方たちもいますし、かたや企業という立場からそういうものに関わってくださっている方もいらっしゃいます。そういういろいろな立場の人、地域レベルで様々な活動がされていると思いますが、日本の場合、行政が主体になって様々なまちづくりや地域振興をやっているケースというのがほとんどです。どういったケースが良いのか悪いのかということではないのですが、やはりどういった立場の人たちが主体になるかによってまちづくりや地域文化のあり方というのが変わってくるのではないかと思います。森さんたちの活動は地域組織、住民のみなさんのレベルで始まった活動であるので、行政との関係の持ち方とかなどはどのようにされているのかと非常に興味深く聞いていました。さらに上にいきますと国家とか社会とかというものになると思うのですが、様々な立場があり、それぞれの立場によって地域文化が模索されていると思います。

私は地理学ということもありまして、先ほどの森さんのお話の中で沢山の写真を見せていただきましたが、地域文化は色々な要素から構成されているわけですが、中でも「景観」という言葉をだしましたけれど、景観というものに注目していますとその地域や場所の特徴、色んな立場の方が目指している地域文化のあり様がわかってくるのが景観というものではないかと思っておりまして。景観というものは風景という言葉に言い直しても良いのですが、単純にいうと、私たちの周りにある様々な自然環境、物理的な環境を含めまして景観というひとつのまとまりとして捉えることができるとい

うことなんですが。説明を加えますと、景観の中には自然環境や植生、地形といったものも入ってきますし、谷根千の震災や戦災でも焼けなかった歴史的な環境というのも当然入ってきますし、またそこに暮らしてきた人びとの暮らしそのもの、文化的な環境というのも景観には反映されます。そしてさらに、そこにいる方々がどういう商売をしているのかという経済環境ですとか、どんな社会的なつながりを持っているのかといった社会環境、全部一緒になって真ん中にできているところが景観なのではないかと思います。

さらにですね、景観とは目に見えるものというだけではなくて、先ほど森さんのお話の中にも谷根千らしさを感じさせる写真や表現がでてきたように思いますけど、景観を作っていく、これは意識的にせよ無意識にせよということなんですけど、景観を作っていく様々な主体がどういう意味を込めて景観を作っているのか、また景観を見る人、観光客もそうですが、どういう目で景観や風景を見るのだろうかという内面的なものも含めて景観を捉えてみると面白いかと思います。

私が思いますに、谷根千の雑誌を見ますと、地元の方々の様々な暮らしですとか、働いている様子ですとか、お店の情報ですとか内容そのものはローカルなものなんじゃないかと思います。でてくるものはほとんど地元に根ざしたものだと思います。ところが、雑誌を見せていただきますと、全然谷根千に関係のない私でも1ページ1ページめくるのがわくわくしてくるような感じがありまして、谷根千にもともと関係のない、第三者的な人びとがなぜこれだけ谷根千に魅力を感じるのかといいますと、谷根千が持っている場所や地域が持っている広い意味での景観の備えている特徴というものが人びとを引き寄せているのではないかと思います。また森さんたちの非常にエネルギッシュな、楽しい、内容の濃い紙面づくりが当然あるわけですけれど、谷根千の特有の景観的特徴が人びとをひきつけていると感じました。町並みですとか建造物であるとか景観的な要素に加えまして、実際にこれまで活動の中心に担ってきました森さんたちや森さんたち以外の実際に住んでいらっしゃる方々がどのような思いでいらっしゃるのか。また建造物保存の話もありましたけれども保存活動に実際加わる方というのはみなさんがみんな参加するわけではないと思いますが、どうやって人を動きの中に巻き込んでいくのかということは非常に重要であると思いますので、そのあたりもまたあとでお話を伺いたいと思いました。

とりあえず私の方は以上です。

小川：地域文化とは何か、またその背景となっている要因についてお話いただきました。一方でグローバリゼーションとか、都市開発が進む一方で、ローカルなものを大事にしようという動きがあります。その中で文化の実践・継承の主体は誰であるのか、谷根千に例をとっても面白いのではないかと思いました。自然環境、歴史環境、経済環境、いわゆる生業といったものが重なった部分が景観として読み取れるのではないかというお話でした。そして谷根千という非常にローカルな話、雑誌を開くと谷根千の社会の規模が出てくるわけです。そこに住んでいる人だけではなくて、他の地域の人たちがそれを読んで楽しい、面白いと感じる。そのあたりについて、地域の魅力、またそれをまとめて発信する活動の魅力があるのかもしれません。

ではまず最初に、椿さんが最後におしゃった、外に対して魅力のあるローカル性とは何なのかについて森さん何か考えられることはありますか。

森氏：今日のシンポジウムはどなたが考えたか知りませんがすごい良くできていますね。私が現場で見てきたこと、やってきたことを話すと、椿さんがこのように概念化して説明してくださって。今日参加された方はとても良くわかってしまったのではないでしょうか。

私は逆に小川さんとはある一時期は一緒に活動をしておりましたが、このようなことを話したことはないのですが、小川さんは地域の一読者として谷根千という雑誌の存在をどのように感じていらっしゃったのか、お聞きしたいです。

小川：実際住んでいる人がどういう目で見ているのかということですが、私も谷中そのものに住んでは25年というところです。それより以前35年程は地続きの上野というところに居りまして。地域概念としてはほとんど同じところなんですけれど、学校区でいいますと小学校区は違います。中学高校は台東区側に関しては同じ地域ですので、人のネットワークというところでつ

ながりがあるので、ずっといるという気になること、それからこれは谷根千を中心にして昔やった路地だとか地域の調査のときに住民にアンケートをとったんですね。この地域で好きな場所とか重要な自然は何ですかというときに、谷中霊園というのと不忍池というのが出てきました。距離は大変近いのですが、行政的には谷中墓地、上野公園は都立公園で。土地の管理としては、町ではないところなのですが、それが町の重要な空間として捉えられているのが面白いなぁと思っています。そういう点で上野まで含めて地域の一部なのだと地域の人たちは考えています。ただいわゆる日常生活圏となると、散歩などでは行くのだけれど、日常の買い物圏ではなかったですね。いまでは谷中の人たちは御徒町の多慶屋という安売り店に行きますし、私たちが昔持っていた地域感よりはずっと広くなっているのではないかと思いますね。

そういう中で、私が谷根千を客観的に評価できるかというとできないかもしれませんが、ひとつは地域の魅力を引っ張り出すという役割として非常に重要だったし、それが地域のアイデンティティを作るというか、私たちの町がどのような町であるのかを認識する上で重要であったと思います。

よその地域の話で恐縮ですけど、岐阜県に白川郷という合掌造りの伝建地区がありますが、そもそも地元の人は、大きな家で萱を葺くのが大変で早く壊したいと思っていた訳ですが、そこに毎年東大の建築学の先生たちが行って「ここはいいお宅だ」といって帰って10年位通ったということです。そこで住んでいる人たちも「うちの建物はこんなに住みにくいのに価値があるのかねぇ」ということで、それから守ろうという気分がだんだん高まっていったと聞いたことがあります。価値を自分の外側から情報を与えてもらうのは非常に重要なことだと思います。

昔、東京芸大の公開講座でこんなことをやりました。公開講座に参加した人たちに、当時のインスタントカメラを持って町の魅力的なところを写してもらおうということをやりました。その時にある参加者が「坂があるところがいい」といって写真を持ってきました。住んでいる人は坂がありますと下りはともかく一度は登らなきゃならないですね。下の人は行きに登る、上の人は帰りに登るということで、坂というのは大変不便な地形だと思っていたわけですけれど、よそから来た人に「坂があるのは大変良いですね」と言われました。で、実は私も上野の地域から家を探すときに、山手線の外側へ探しに行ったことがあります。そしたら行けども行けども同じ景色なんですね。これはさっきの谷中の場合は違います。坂があるために少し移動すると景色がどんどん変わります。いわゆる下町である山手線の東側に行ったときに景色に変化がないことに対して息苦しさを感じてまたもとに戻ってきました。こういう風に生活している人そのものは普段は全く気付かないものなんだけれども、言われてみれば「へぇ」と思うところがあるんですね。多分そんなところを示してもらったのではないかと思います。 ひとつ地域のアイデンティティを作るうえでの情報を投げかけてもらったという点で良かったと思います。

また住んでる側からはそのくらいなのですが。ただ谷根千が有名になって谷中は一種の観光地になりました。土日になりますと日暮里駅は町歩きの人たちが行列を作って来るようになりまして、その人たちを相手にするような商売も出てきました。谷中名物なんとかって売っているものが2、3年前にできたものだったりして。歴史性という部分はストレートには継続していないですが、気分としては今年できたものも昔からあるような顔ができるというなんとも不思議な町です。住んでる側からしたら、なんとなくそこに違和感がない訳ではありません。同様にさっき紹介されました芸工展というものがあります。今は町中博物館、いわゆるエコミュージアムそのものをやっているのですが、ただ普通に住んでいる人にとってみればあまり関心のない芸術文化であるし、わいわいがやがややっているという点では、あまりいい顔はされないんじゃないかと。その辺がこれから先どのくらい地元の人たちに同感してもらえるか、一緒に何かをやる場が広がっていくかということが必要なのではないかと思います。あまり答えにならなかったですかね。

森氏：お話聞くと刺激されていろいろ思い出すものですから。作っている側からすると、「この角を曲がるとこんなお店がある」とかいうローカルな話をどうして他の地域の読者が面白がるのかというのはすごく不可解だったんですね。全国に500 ～ 600の郵送読者がいます。海外にもいるんですけど。それで多いケースは、昔住んでいた人ですね。子どものときに根津小学校に通っていたとか谷中で遊んでいたとかいう方がいます。それと私たちはお墓人口と呼んでいるのですが、3万坪の谷中墓地だけで17,000程のお墓があるのですね。お寺100軒分集めるともっともっとあるんですね。そこにお墓を持っている人、さっきのどなたか谷中に墓地があるのでとおっしゃってたんですが、そうすると小さいときからお彼岸・お盆になると親に連れられてお墓参

りに行って、帰りにここでお煎餅を買ったり飴を買ったりという風にすると、そこに谷根千が置いてあるから、買って帰ってくださるという有難い人たちがいます。

それと日本医大に入院している患者さんがパジャマで買いに来るということもあるんですね。長いこと療養しているうちに飽きてしまったんだけど、この近くのことを知りたいとか、軽くて小さな雑誌だからベッドの上で読んでも疲れなくて良いとか、1冊読んだらやみつきになってしまったとか言って、買いに来る方があったりとか、色んな面白い読者がいらっしゃるんですね。

なかには自分たちがずいぶん前から住んでいたのに戦後生まれの何も知らないお姉ちゃんたちがうそばっかり書いているなんてよく言われたものです。町というのは戦後で60年住んでいても新住民なんていうんですね。住職なんかに怒られたりして。「じゃあ具体的にどこがどう間違ってるんですか」なんて若い頃は喧嘩したものですが、しどろもどろに「なんとなくあっちもこっちも間違ってる」なんておっしゃるものですから。具体的に間違いの指摘は謙虚に受け止めますから、具体的にどこがどう間違っているのか教えてくださいということは言ってきたつもりですし、あくまでもこれは地域史のたたき台であって、歴史というのは評価が定まるのに時間がかかる。例えば「根津のつつじ祭りは僕が発案して始めたものなんだ」という話を4号目位にしたんですね。そうしたら「いやあいつじゃない。実は俺だ」という方が何人も名乗りを上げたんですね。やっぱり地域史は難しい。間違いはすぐ訂正しましたが、真実はいつまでもわからないという問題もあります。

これも余談ですが、ひとりから話を聞くのと、大勢集まって話を聞くのとではどちらが良いのか。確かに触発されて、こうやって3人で話していると、思い出して、あれもこれもと話が弾む場合もありますし、逆に後でテープを聞くと誰が何を言っているのか全くわからないということもあります。なかなか難しいと思いますが。

確かに2人がおっしゃったように私たちの地域の多様性、それからバラエティですね。これは焼かれた地域の方たちに申し訳ないのですが、東京大空襲で焼かれた地域というのは台東区でもほとんど区画整理をして、中規模の道を通して、その周辺はその道幅に対してビルが建つので、碁盤の目状の町があって、同じような中小ビルが並んでいるんですね。三筋にある図書館、私何度も行っても覚えられないような、同じような町なんですね。そういった中で谷中というのは、クネクネしていて曲がったらどこ行くかわからないとか、でもどこかに個性的な家が角々に建っているとか、大きな碑が建っているとか、そういった点で魅力がある。その魅力におんぶして私たちも地域雑誌をやってきたし、逆にやり始めてみてから、なんて幸せな運の良いところで始めたんだろうと思いました。

私は地域で生まれ育っていますが、やはり1回大学に行くとか、就職するとかいうので別の町に出たから、そことの比較ということで、うちの町は良いとか住みやすいとかいうことを感じることができた。地域にずっと居続ける人たちは「こんな何もない町」「こんな当たり前のもの」を人が喜ぶのか、すごいと思うのか、わからない人が多いんですね。例えば素晴らしい朝顔を育てていたり、菊の花を植えておられるおばあさんがいらしても、やっぱりそれを外から来た人にほめてもらうとか、すごいですねとか、いい家に住んでいますねとか、僕もこんな家に住んでみたいんですとか、言われるだけでうれしい。そして「そうかいいところに住んでいるのか」と自分を再発見していく。

そしてさっきおっしゃったように、やっぱり古い家に住んでいることが、貧乏だということに直結するんですね。建替えられない人だって思われているんじゃないかとか。せっかく素晴らしいお家を壊してしまった人がいたので駆けつけてみると、「こんな汚いむさ苦しいものを町にさらして生きているなんて、恥ずかしくて恥ずかしくてしょうがなかった。今回やっときれいな新建材の家にすることができました」と喜んでいらっしゃったりとか。またあるお店が店をたたむとき、すごく古くて良い木の看板だけでも残してくださいと。でも「あんたたちは知らないからそう言うけど、この看板には私の姑に散々いじめられた思い出が染み付いてるの」とか言われたりして。やっぱりそういった点で、自分は何も知らなくて、外から見たらいいなと思うものにその人たちがどんな感情を抱いているのかということにすごく違いがあると。そういったものはかけがえがないから、しかるべきところに看板や台帳を寄付してくださいとか、このファサードだけは残してくださいとか言ってきたわけなんですね。

私自身も町を、外から来た方、地方から来た方をお世話するので、歩くんですけど、そうすると、思いがけない見方というのをしてくれます。例えば私、車も乗らないし全く興味ないんですね。それで地方から来た若い子を案内していたとき、「この家はシボレーに乗っている」とか「これに乗っているからこの位の年収の家だろう」とか言うんですね。乗っている車から家のなかを推し量るなんて初めての体験だったので逆

に面白かったんですけど。そういう違うことに興味を持っている、違う専門性を持っている人の目で歩くと非常に面白い。

椿：先ほど、なぜ不特定大多数の谷根千に関係のない人たちが魅力を感じるのかと言うことについて、景観的な魅力という風に言ったんですけれども、それとともに景観の中に私は入れているのですが、日常的な暮らしぶりというのでしょうか、さっきお店の前に椅子があって誰でも座れるようになっているとか、狭い路地のところにも植木が沢山置いてあって緑が沢山あるとか、何気ない生活の風景、暮らしぶりみたいなものが、日本人のどこかに共感をさせるような要素があるのかなぁと思うのですが。

一方で先ほどの森さんのお話のなかに多様性という言葉が出てきたのですが、昨今谷根千という場所がガイドブックなどでも盛んに取り上げられておりますが、ガイドブックの中ではわりとステレオタイプ的に「下町情緒」とか「江戸情緒」とか単純化してイメージ化されている風に思えてきたものですから、多様性という言葉がでてきて非常に興味深いなと思いました。

そこでまたメディアについてお聞きしたいのですが、1冊1冊見せていただきますと、非常に記事の内容ですとかテーマが多様でバラエティに富んでらっしゃるのですが、これはどうやってアイディアといいますか、どんなテーマでどんな企画にしていこうかということをお考えになってらっしゃるのでしょうか。

森氏：だいたい企画は地域からもらうんですよね。やっぱり配達なんてことは雑用なんだからアルバイトでも雇ってやらせればいいんじゃないかななんて言われるんですが、配達を3人で手分けして、今は4人ですけれども、必ず届けて、次の納品をして、領収書を書いてお金もらって、帳簿をつけて、という繰り返しをきちっとやってきたから、他の雑誌は雑誌を作りたい想いだけで、そこで途切れちゃうのは、配達・集金・帳簿付けということがうまくいってない。でも私たちはそれをしっかりやった。また配達が次の企画をもらう、吸い上げる場所になっていて、300店行くとだいたい「なんでこの人のことやらないの」とか「あそこの眼医者の先生は実はマジシャンだよ」とか「竹竿、釣竿を売ってる店があるのは珍しいよ」とか聞き込んでピンと来て、じゃあ次これやろうとか、この特集もできるなとか、自分の頭から創り出しているわけじゃないんですね。

小川：そういう1人の目では気が付かないことが、情報網が、お客さんと言っているんですけれども、売ってくれる人たちの間から入ってくるという、これは中央の雑誌では絶対できない方法ではないかと思います。

また1つお聞きしたいのですが、森さんの谷根千工房という雑誌を出している組織は有限会社ですよね。これは今ですと流行っているのにNPOというのがありますし、小さな会社でも作るのに株式会社というのもありますが、有限会社である意味というのは何かあるのでしょうか。

森氏：1つは、私たちが始めた頃、まだNPOというのがなかったのですね。また良く聞かれた質問に「あなたたちのこれは道楽なの、それとも仕事なの、とか趣味なの、儲けるつもりなの」という2分割の問いが絶えず絶えず聞かれました。そのときの気分で「趣味です」とか「仕事です」とか答えてきたのですが、NPOという言葉ができて、労働報酬は多少は出せるようになってきたけど、コストよりも公共性を重視している仕事なんだということは理解されやすくなってきたと思うんですね。

ただ、私たちの頃はNPOがまだなかったので、最初はそんなにみんな気にしなかったのですが、印刷部数も1,000部なら印刷屋さんが「仕事の合間にちょっと刷っておいてあげるよ」みたいなことで向こうも計上しないで済んだのですが、10,000部とか刷るようになるとそれぞれのお店の人も仕事としてきちっとしてよという風になりました。わからない任意団体や趣味のサークルとお付き合いするというわけにはいかないのですね。1番いいときで年間売り上げが1,400 ～ 1,500万あったのですが。でも1,400 ～ 1,500万といっても三人がそれで食べる仕事でやっていける規模じゃないんですね。そこから経費、印刷費や事務所の家賃とか色々引きますと半分も残らない。せいぜい600 ～ 700万円利益があったのを、スタッフは朝から晩まで土日もなく働いている。私たちは公務員くらいのお給料をもらっても決して恥ずかしくないくらいに働いていると思ってたんですけど、そんなになったことは一度もないですね。今

では私は10年以上前から一銭ももらってなくて、あとのスタッフ、最低限東京で生活していくために20万円ずつ位配ってるんですけどもとても足りません。

そういうわけで、NPOがなかったので、でも取引先との関係もあり、口座を開かなくてはならなくなったこともあって、その時は120万円で有限会社ができましたので、40万ずつ3人で出し合って有限会社にしたんですね。もちろん株式会社というほどの大きさのものではない。その後、NPOというものができてから、何度かNPOにしようと思ったのですが、何でNPOにしなくてはいけないかということがわからなかった。1つはそんなにメリットないんですよね、NPOにしても。またNPOにする意味というのは、公共性のあることをしているんだよという信頼を得るためもあると思うのですが、私たちはすでに、信頼性は、傲慢な言い方ですけどもう獲得していたんですね。ある程度この人たちは営利とか宗教的・政治的な意図があるわけではなくて、地域を守り、育てるために仕事をしてるんだということはほとんど認識されていたのでNPOと名乗る必要はなかったですね。むしろ私たちは消費社会の中に埋め込まれた小さな仕事としてもグッドビジネスがしたいと。いいことやっているからみんなにお金出してくれとか、委託事業受けるとか、助成金もらうとか。これみんな谷根千工房ではもらってません。周辺組織の本当のNPOである上野谷根千研究会であり、文京建物応援団であり、赤レンガの東京駅を愛する市民の会であり、そういうかたちでしかもらってないですね。

最近は谷根千も本当にお金が足りなくなってきて、それぞれに稼ぎをしてきて、こういう講演料なんかもつぎ込んで、また本を担いでいってこういう売ったので次のを作っていくと。私利私益にはならないものなのでこうやって売ることができるわけなのですが、そんな風にグッドビジネスでやってきたんですね。

小川：もうひとつ聞きたいのは、助成金を谷根千工房ではもらってないということは、特定のオーナーに拘束されないということもありますが、そのあたりはどうですか。

森氏：最初から、大企業からは広告はもらわない。もらうのはだいたい地域のお店なんですけど、でも地域のお店は広告料出せないと。名刺広告1万円程度で出していただいたんですけど、年に4回なので4万円なんですね。ちょっとした企業や商店にとっては宣伝費としては大きくないんですけどそれでも結構ブーブー言われましてね。広告出したけど2人しかお客が増えないからやめるとか言われたり。なんせ1枚分の広告作るだけでも版下も全部こちらで作るわけで。普通大きい会社だったら、完全版下で持ってきてもらって貼ればいいんですけど、それも自分たちで作るので、手間のほうで言ったら完全に赤字なんですね。なのに1回でやめられちゃったら困るから、せめて4回は続けてくださいとか言ったりですね。

1回だけ間違えてもらっちゃった大広告があるんですね。それはNTTからもらいました。NTTのタウン誌大賞をいただいたので、どうしても宣伝を出したいということで、なんと1ページで20万円出すというのでついつい戴いてしまいまして。でも20万円いただいたからにはそれ位手間をかけた広告を作ろうということで、加山雄三がタウンページを抱えているというのをバンと1ページ載せて欲しいとNTTの方が言ったんですけれども、それでは私たちの雑誌になじまないし目立ちすぎる。私たちは毎回、「子どもが熱を出したらこの小児科の病院に行きましょう」とかそういう公共的なところとか、「畳の張替えをしたい方はこちらへ」とかクリーニング屋さんとか、毎回調べてピックアップした。こういう情報はなかなかないんですよね。文京区だけだったらあるんですけど、それだと数が多すぎて、探すのが面倒くさいと。台東区と文京区と北区の田端と、日暮里の畳屋さんとか区境を超えた生活圏で小児科医とかやりました。それはすごく手間隙かけたので20万円もらってもいいかなと。そんなようなことをしていたわけで。

今、補助金を取るのが上手な団体が多くなっていて、私は審査で結構やっているのでよく見抜けるんですけれども、意外に市民運動を装った企業であったり、コンサルであったり、そういうところも出してきますし。私はやっぱり補助金をもらってやっていることは補助金が切られたときに終わるんだろうなと思っているので、補助金がなくてもやっていけるような活動をしたいと思ってやってきたわけなんですね。

小川：あと20分位になってしまったので、少し復習というか確認をしていきたいと思うのですが。椿さんは外国の景観のことをいくつかやってらっしゃいますけれども、そういうところと対比しながら東京の都市というものをどのようにお考えでしょうか。

椿：大きな問題を投げかけられてしまいました。外国といいましても、私が実際自分の足で歩いているのは、アメリカのロサンゼルスとかサンフランシスコ、カナダのバンクーバー、本当に限られた場所だけですけれども。東京にしてもそうですが、かなり共通していると思いますのは、1970年代以降都市再開発というのが色々

なところでどんどん進んできまして、逆に言いますと古いものがどんどん壊されていくという動きがあると思います。その中でやはり谷根千の方々の活動のように、壊されていくものを、このままでいいのかという動きが出てまいりまして、そういう中で歴史的な建造物を保存するとか、新しい形で活用していくというようなことが、共通して見えてくることです。でもやはりアメリカの場合はですね、森さんたちがやってらっしゃるような、まちづくりと地域誌作り、情報誌を作っていくということが同時並行に、森さんたちの場合は雑誌作りが先行していきますが、進んでいくということは、多くないかなと思いまして。

アメリカの場合にはエスニックという別のカテゴリが強く効いているものですから、エスニック単位で色々な取り組みやメディアというものがありまして、逆に言うと、アメリカのほうの行政というのはエスニックのそういったまとまりをうまいこと突出させないようなかたちで都市をきれいにし、それぞれの不満や問題点を隠して行こうというような動きがあるように思いまして。

一見するときれいになっていいなということもありますが、実はそこに住んでいるマイノリティの方の生活のレベルまでおりていくと、都市がきれいになっていく反面、そこに住んでいる人たちの暮らしはどうなのか、取り残されていくことへの危機感がありまして。ですから今日お話いただいたような谷根千の取り組みというのは、本当に地域に根ざした活動、取り組みという点で逆の良さがあるのではないかなと感じております。

小川：日本の場合には、県人会というようなことはあり得ても、出身による集団というのはあまり表面化してないとは思うのですが。東京の場合では、私の住んでる台東区のあたりは戦後になってから、第二次大戦の被災者が上野公園に住み着いた問題から、一種の差別というのがあったと思うのですね。普通の町の中ではなかなか見えないと思うのですが、それ以外に町のなかでひとつの集団が差別されるような問題、90年以降から一般的に日本の場合では出てくると思うのですが。

谷中の場合では、私の住んでいる谷中3丁目という町会では町会長はすでにそこの出身者ではありません。青年会、といっても、私と同じか年上ですけれども、80位の方もいますが、結構よそから来て数十年住んでいるという人もおります。そういう点ではよそ者をそれほど排除しないでやれたということがあって。森さんはそういうところに取材に行かれて何か感じますか。

森氏：おっしゃるようにずいぶん変わったんでしょうね。この2、30年位に。前は新住民が町会長になるなんて考えられなかったですね。やっぱり、住んでる年数による差別があると思いますね。私はやっぱり古くからいる方は大事だし、知識を持ってるし、彼らが持っている付き合い方とか生活文化を後から来た人が撹乱するというのは良くないと思うのだけれど、住んでいる以上、昨日来た人も前から住んでいる人も、平等に同じ権利を持っていると考えています。

たとえば日蓮宗の寺が多いので、冬になると寒行というのをドンチキドンチキやるんですけれども、新しくマンションに来た人は、あれうるさい、やめさせろとか交番に言ったりするので、そういうのについては、これは昔からの宗教行事であり風物詩で、ということを新住民に伝えるということは私たちがやるべきことだと思うし、また観光地になったということに苦々しい想いを持っていらっしゃる方もいるから、お寺を訪ねるマナーとか、路地に大声でしゃべって入っていかないとかエチケットというかそういうものを媒介して伝えていかなければならないと思いますね。

でも差別とか区別とかは少なくなって来ているように思いますし。それから私たちが始めたときは自民党が一党支配で戦後ずっと政権を持っていた頃だったので、完全にその組織ができてしまっていて、青年部といってもみんな白髪なんですけど、これが選挙になると自民党の候補を担いで選挙部隊になってしまうとか。町会＝自民党になっちゃったりということも多かった。その後それがくずれて、政権が変わったり新党ができてたので。昔は町会なり組長のいうことに反対するとすぐに過激派とかアカとかピンクとか言われたんですけれども今は何を言ってもわからなくなっちゃった。何を言っても風通しが良くなったし、雇用機会均等法もできて女性も元気になって、女性の意見も通るようになったし。最初の頃は相当町会とももめましたけど、今は町会長さんも協力してくださって、工房を訪ねてくださったりいっしょに何かやったりしています。

小川：今までは国レベルでそういうことが進んでいったのですが、一方でローカルな場での活動が市民権を得ていったと。それから、私自身谷根千を含めて、まちづくりという言葉とそこで色々やっていることがつながっているのかといつも半信半疑ではあるんですね。何がまちづくりなんだろうか。私がもと住んでいた上野地区ですと、まちづくりというのは企業の偉い人が集まってどういうビルを建てるのかということがまちづくり協議会のテーマでして、そこに住んでいる一個人というのは全く排除されています。ところが谷中に行きますと、1軒1軒の家から成り立っている町会がまち

づくり協議会を作って、私も環境部会に参加していますが。部会は任意参加でして、台東区にありながら文京区の人も入れるという部会をやっていますけれども。そういう時に地域の住み方の違いみたいなものもあるんだろうなと思います。前、谷根千工房の別の方に伺ったときに、これほど話をしてくれる、取材のしやすい地域はないとおっしゃっていたのですが、そういう人の生活、地域の生活というところで感じることはあるでしょうか。

森氏：谷中はビルとかマンションとかが少ないので、一戸建ての家とかお寺を中心に一人一人の顔が良く見えるという感じですよね。ひとつひとつの商店、あそこの路地の何とかさんというようなことはお互い見知ってるし、学校は谷中小学校ですものね。子どもたちを通じで親同士も「あそこの何とかちゃん家と上の子とは同じ学年だ」とか非常に絆が強い。一人一人が目立っているので、後から来た人もそれに親和しないと生きていけないので、後から来た人も地域のやり方、流儀を大事にしているし、そういうのを好む人が住んで来るんですね。選択的居住者なんて私は言ってたんですけれども、ジョルダン・サンドさんなんて、今アメリカの大学の先生になっていますが、22歳くらいのときに谷中に来て地域の長屋に住んでいました。みんなといっしょに御輿を担いだり、お祭りの店番したり、そんな風に住んでいました。

あと最近、由緒ある立派な家に住むのではなくて、和のブームというのですか、若い人が四畳半一間でいいから谷中に住んで、ちゃぶ台でご飯食べて、住みたいと。そういう人にはとても住みやすいし、物件があるんですね。若い新婚の二人には貧しいのもご馳走みたいなところがあって、二人でお風呂に行って、お寺でやっている寄席を聞いて、浴衣着て、団扇で扇いで歩いたりなんかして、すごい楽しそうに暮らしている若い人たちが増えています。

谷中はそういうわけで取材がしやすいんですけど、逆に良い読者は千駄木に多かったりするんですね。千駄木はお屋敷で1軒1軒バラバラでお互いに付き合いはないのであっちに取材に行ってもこっちにそれがもれるということははないのですが、谷中だったら朝、私がサンドさんなんかと取材に行くと、そのうわさが広まっていて、次の日に行くと、「昨日、何とかさんと何とかさんのところに話聞きにいったんでしょ。あのアメリカ人と一緒に」なんて言われて。そういうことは千駄木ではまずないんですね。ただきちんとした手紙で新しいこと教えてくださったりという人は千駄木にも多くいらっしゃる。

根津は根津でまた、路地とか縁側づたいに情報が広がっていて、「この人、何とかが聞きたいんだから話してやって」とか、根津というのはまた違うんですね。谷中は人口密度が小さくて、お寺が大事にされながら、影では悪口も言われながらおっとり人が住んでいるのですが、根津はもうちょっと世知辛いというところもあるんですけど、違うタイプの下町なんですね。

小川：新しく入ってきた人は今のお話にあったように、この地域のことに関心があって入ってくる方も結構いるので将来の読者といいますか、運動の協力者になるということもありうるわけで、その辺で新住民・旧住民線引きができない状況が生まれてくるわけでして。例えば先ほどちょっと話があったマンション建設反対運動も結局法的にどうにもなくなって、ビルが建つということになり、反対運動をやめました。明日からそこに住む人が自分たちの隣人になるんですね。これは感情的には非常に苦しいところだったと思うのですが。みなさんこんな想いを複雑に持ちながら生きているのかもしれません。

もうそろそろお時間のほうですけれども、椿さんに何か全体を通してお話をいただいて、森さんにも最後に一言いただきたいと思います。

椿：まとめというよりは、最後にまた森さんにお聞きしたいのですが。森さんのお書きになった『小さな雑誌でまちづくり』、最初の頃の奮闘の様子をお書きになったその中で、どういうものを目指しているかということについて、「プライドオブプレイス」というまちづくりをしたいと書かれていたのです。私は単純なので、「プライドオブプレイス」なんてかっこういいなぁと思って、ついついメモってしまったのですが、場所や地域に対する誇りとか、地理学では地域に対する愛着とか、場所に対する愛なんて表現もあるのですが、森さんはもちろんなんですけれども、まわりにいらっしゃる方とか住民の方にも広がってきたなぁという実感を持っていらっしゃるかどうかということについて最後、お聞きしたいと思います。

森氏：今日は偉そうなことを沢山言ってしまって。今の私たちの状況はとても苦しいので、そんなに夢見るようなバラ色の話はできないんですね。本当にこんなに忙しい22年を過ごしてきたために私の夫は去ってしまい、あとのスタッフでも伴侶を亡くした人もいるし、人生というのは一筋縄ではいかない。特に女の人生というのは子どもに夫やいろんなことなどに絡まっているので、可変的な変数が多い中を22年、仲間と仕事をし

てきたと思うのです。

ただ「谷根千」を始めたときは、私たちの地域の人たちは本当にプライドを持っていなかったと思います。例えば「こんな過疎化したところ」とか「近代化に乗り遅れたところ」とか「谷中は山手線内でも地価の低いところだ」とか「物騒だ」「お香臭い」とか否定的な言葉ばっかり聞かれていたのですが、だんだんそこから価値が転換していって、「江戸の香りが残る町」とか。さっきも出てきたステレオタイプな「生粋の下町情緒」とか変なレッテル、いやなレッテルもあったのですが、「文化人が愛した町」とか「お寺があって精神的な豊かさがある」とか「お香の香りがする」「鐘の音が聞こえる」「夕日がきれい」「富士山が見える」とか、少しずつみんなを元気付けて、自分たちの町はかけがえのない気持ちが育ってきたと思うんですね。

私個人的には、地域で3人の子どもを育てて、しかも10人の兄弟、一緒に仕事をやっている仲間たちの子どもを合わせると何十人もの異年齢の集団の中で育てられたことが一番よかった。私たちの子どものときはむしろ近代化路線で、ピアノを習って、フリルの付いた洋服なんかを着て、そんな思い出が多いんですけれども。私が古いところ古いところばかりを調べるのについて来たので、すごく日本文化とか古いものを私の子どものころより享受できたと思います。お祭りですとか職人さんの仕事を見るとか昔ながらの製法のアイスクリームや飴を食べるとか、そういうことを含めてあって、そういうところで子どもを育てられたのは良かった。小川さんのお子さんも谷中で虫ばっかし取っているかもしれないけど、子ども時代を保障する昆虫がいる谷中墓地やお寺があるということは、やっぱり子どもを外で育てられて良かったと思いますね。

私個人的には、50年位同じところに住んでいて、まだ住み続けたい気持ちも半分ありますけど、違うところに一度住んでみたいという気持ちもあり、やっぱり自分の気持ちの核になっていたような建物、さっきの内田百閒の住んでいた建物とか曙ハウスという文化住宅とか、いくつか私の大事にしていた建物がこのところ急激に消えてしまったので、すごく悲しいというかがっかりしちゃってるんですね。

むしろ飽きっぽいのによくも二十年以上続いたと思います。でも転機ですね。私は雑誌はもうすぐやめるし、本も売れない。それでもやりたいことがいっぱいあるので、大学のほうも今年でやめることにして。半分ちょっと農業がやりたいと思って、祖父の地の宮城県丸森というところに家に小さな畑を借りて、そっちに何割かは行ってもう少し自然の中でゆっくり自分のことについて考えてみようかななんて思っています。すぐ友達ができたので、谷根千にも友達がいるし、引越しても友達がいるので、そういう意味で私は幸せだなと思います。どうもありがとうございます。（会場、拍手）

＜講師プロフィール＞

小　川　　潔（おがわきよし）

東京学芸大学　環境科学分野　助教授

専門分野は環境科学。「タンポポ類の種生物学および保全生物学」をテーマに、在来種、外来種及びそれらの雑種の生活史を明らかにする研究を行なっている。

上野・谷中の公園づくり・まちづくりにも長年携っており、地元では「しのばず自然観察会」を主宰。学内のプロジェクト学習科目においても、上野・谷根千地域でのフィールドワーク授業を展開中である。2005年より、国分寺市廃棄物の減量及び再利用推進審議会委員（会長）も務めている。著書に「日本のタンポポとセイヨウタンポポ」（どうぶつ社）。

椿　　真智子（つばきまちこ）

東京学芸大学　地理学分野　助教授

専門分野は文化地理学。研究テーマは「日本おける北米におけるフロンティア景観の成立と近代的表象」。近代以降のグローバリゼーションと人口流動に伴う都市とフロンティア、多民族社会の形成・変化について、日本とアメリカを対象に比較研究をすすめている。

また景観・風景をキーワードに、写真や画像資料を用いた調査方法の検討ならび実践も行なっている。

また、2005年には東京学芸大学オープンカレッジ「武蔵野の自然・歴史・文化」の講師も務めている。